

291  
158

熊野  
少  
素  
集

和歌山縣  
立  
串本古座  
高等学校  
蔵



291  
158

29/  
158  
1

中根七郎氏寄贈

熊野文化叢書第一編

熊野と萬葉集

和歌山縣立串本高等学校蔵

和歌山縣立串本高等学校蔵  
20.10.21  
4084

序

國民意識の強化は今日國民教養の全貌と謂つてもよい。されば我が國三千年を貫ける祖國文化の中に流れたる傳統的國民精神を闡明にし、國民的人格の陶冶を以て徳性を涵養し民族力の強調を期するため、祖國意識、郷土意識に對する教育が力説されて來た。

わが熊野の地は、陸は本州の最南端に位し、千古不伐の森林鬱葱とし、海は渺茫たる太平洋上鯨潮吹く黒潮漂ふところ、實に往昔建國文化の發祥の地にして、又歴代皇室の尊崇篤かりし熊野三山鎮座ましますところ、誠に神秘の地域と謂はねばならぬ。

この遠祖より繼承せる郷土の遺産中に包藏せる史蹟の綜合こそ、正に時代を貫通せる一大文化史たらざるなく、これが展望は實に祖國傳統精神の認識を強からしむる

もの茲に於て文化の靈的生活を望むことを得るのである。

本校教職員相謀り茲に熊野文化會を組織し、各種の郷土文化を分担調査蒐集し以て本叢書を續刊するに至つた。

時代は古きものを晦滅し、加ふるに研索杜撰に陥り、正鵠を失へる点多からんも幸ひ江湖諸賢の御叱正を得ば、以て聊かなりとも郷土を重からしめ後昆を起たしめなば、本會同人の歡喜此の上もないのである。

昭和八年十月

熊野文化會會長 宮崎 諦 寛

## 凡 例

一、本研究は最初田邊中學校々友會誌に發表し、其の後幾部分補綴して一、二の雜誌に發表されたり、されかゝつたりした事がある。

一、今回この小冊子に纏めるにつけ、出來得る丈け訂正、増補して萬全を期するやう考へた。

一、しかして、熊野に關係する萬葉歌を摘出するに當り、少くとも古今を通じて誰かゝ關係あるものとされたものは、私見を加へずに、例令牽強附會と思はれるものでも、すべて採録することを本体とした。

一、歌の解釋については、もつと詳細であるべきが、本冊子の紙數に制限せられ自ら簡略にせざるを得なかつた。

一、出來得る丈け多く地圖を挿入したり、寫眞を取り入れたいのは、山々であつたがそれが出來なかつたのが遺憾である。

一、此の研究に關する一切の事項について、御教示を賜はり、機會あるごとに訂正増補して行きたいものと切望してゐる。

一、本文中の地名については、すべて熊野との因縁のみを説き、他所につきての考證を全部省略した。従つて右地名は他で論ぜられ考證せらるゝは勿論である。

二、本文編纂については、夫々先覺、研究者の賜である事を記して感謝の意を表す。

三、猶印刷について、種々わが儘を申したのに拘らず、校正二回迄するの寛容を示された事を當事者の方々に感謝する。

昭和八年仲秋

編者 識。

### ■ 續刊豫告

(隔月一回發刊の豫定)

◎熊野神代史

◎熊野植物分布考

### 熊野と萬葉集 目次

□装幀 (三栖敏雄氏)

□寫眞 (目良湛一郎氏撮影)

□序文

□凡例

□熊野について

1、名義

2、疆域

イ、牟婁郡

3、沿革

イ、太古時代(神代) ロ、上古時代

ハ、奥熊野

□萬葉集に表はれた熊野

1、眞熊野——熊野浦。

2、出立の松原。

3、室の江——清瀨。

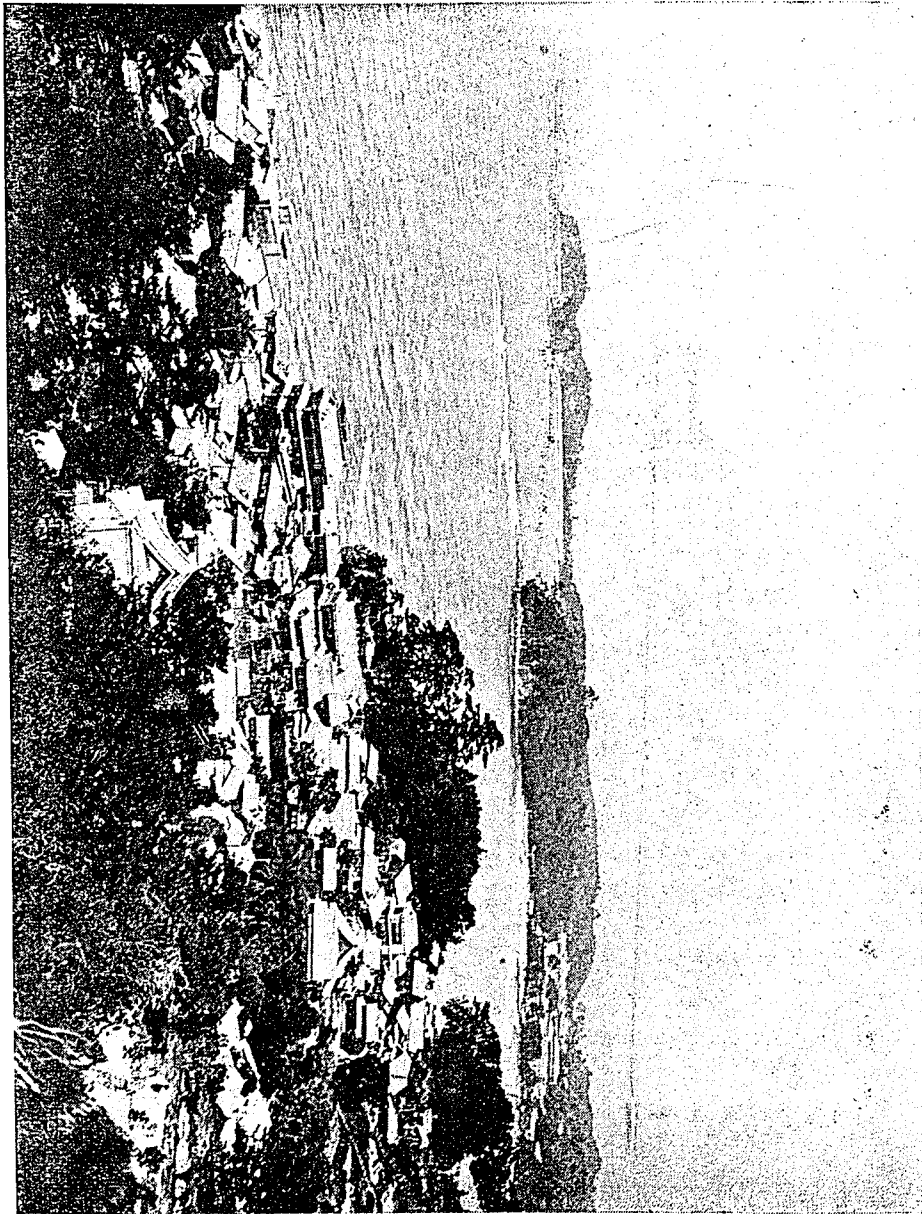
4、阿胡根の浦。

會長 宮崎諦寛氏

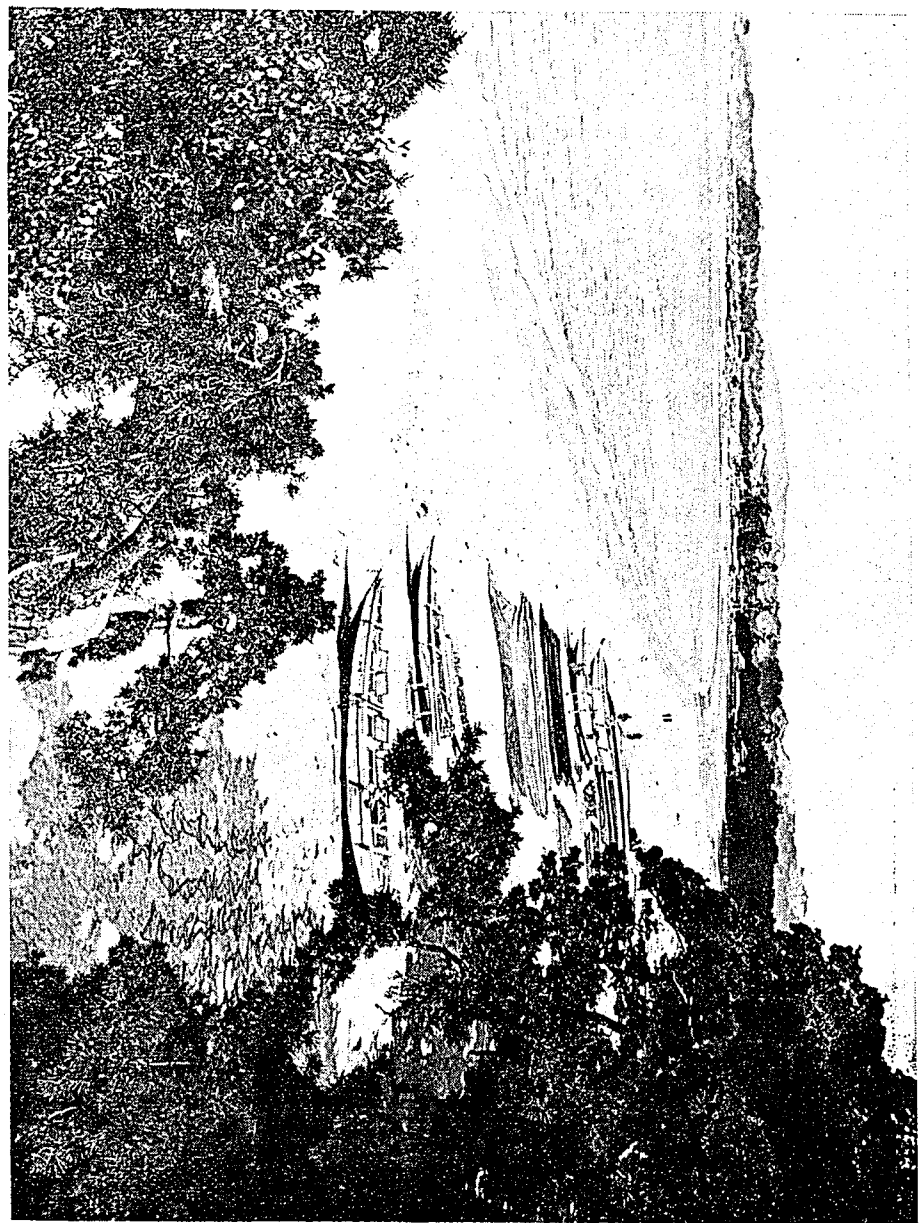
- 5、伊素末——神島。  
 6、風莫の湊——手網の濱。  
 7、白良の濱。  
 8、牟婁の温泉。  
 9、湍門の崎——鳴島。  
 10、形見ヶ浦——妹ヶ島。  
 11、人國山。  
 12、秋津野。  
 13、石倉山。  
 14、三栖山。  
 15、玉の浦。  
 16、佐野の岡。  
 17、三輪ヶ崎。(神ヶ崎)  
 18、八十隅阪。  
 19、小爲手山——嗚呼兄浦。  
 20、伊勢の海。

□ 参考書目

□ 熊野文化叢書發刊について。



濱良白りよ崎湯



(濱ヶ扇) 江の室

## 熊野と萬葉集

あさもよし紀伊はよき國、古き國。

就中、熊野は風光に於いて、天産に於いて恵まれたところ、

熊野よいとこ千古の樹々が、

縁ごろもでねんねする。——俚謠——

上古の歌人は、此處に何を觀、何を感じ、何を歌つたか。向伏す三千六百の峻峰も、鯨群れ行く灘の荒浪も、それは徒に恐しいものでなくて、寧ろ驚異の天地であつたに違ひない。驚くことは感激の生活であり、詩の源泉である。

男性的豪壯の歌調に終始した萬葉歌人に取つて、この地は誠にふさはしい詩境であつたであらう。彼等が家に在れば、甕に盛る飯を草枕、旅にし有れば椎の葉に盛る難行苦行をも厭はずに來たのも、

故ある哉と思はれる。

こゝに萬葉集中に現はれた熊野の歌の摘出を試みたが、其の範圍は主として現在の東、西牟婁郡を主としたものである。しかも、地名の考證が極めて杜撰であり、又牽強附會の點もあるが、それは凡例で述べたやうな意味で傳説のまゝ、又研究された其の人達の考の儘に記載した事、及び東牟婁郡と三重縣に亘つた部分には、恰好の資料と調査が出来なかつた爲に、不充分とは知りつゝ、其の儘に止めた事、更に全体を通じてこれ以外に摘出すべき多くの歌を不注意と不用意の結果、脱漏してゐるであらう事等々、衷心から懸念に堪へない。幸に御指教に與りたい。

先づ熊野について概略述べる必要があらう。

### 名義

- 1、古事記云「神倭伊波禮毘古命、從其地回幸、到熊野村之時、大熊髮出入、即失。」云々。
- 2、南紀名勝志云「凡て牟婁一郡を熊野と云ひ、新宮の興記に昔大熊出でたるにより、熊野と曰ふとあれど受け難し。」云々。

- 3、紀伊名所圖繪には、「熊野の神は出雲より來れるものなれば、其の故跡地名も出雲と同じきもの多し。凡て出雲を本國とすべき歟。」

- 4、紀伊續風土紀云「熊に隈にて、古茂累義にして、山川幽深、樹木蒼鬱なるを以て名つくなり。」云々。

- 5、熊野の、くこ木、樹、ま間、ぬの野、にて木間野で樹木の繁茂する地と考へるのは古昔、木の國の神話などと對照して又現在の地勢に鑒みて妥當とも思はれる。

- 6、熊隈、隈野即ち僻陬の地、飯田武卿の根堅州國と見るなど一脈相通じ、根の片隅國——隈野——熊野と考へるも強ち無理でないやうにも思はれる。

地名、日置はヒ、オキといふが正しく、泣女のことなみめで遊部あそびぶと類似の職業で葬式に必要な人々の居つたところ又安宅あたぎは汚穢を清むる役人の居つたことから來た地名とすると、根堅州國との關係も推察し得るのである。——坪井博士說參考——

- 7、クマ部族の住んでゐた土地から由來するとも思はれる。——坪内博士「國民國語の曙」參照。

- 8、古昔の神の御名と關連してゐないだらうか。

イ、熊野久須毘命

速須佐之男命、乞度天照大御神……(中略)……亦乞度所纏右之御手之珠而。佐賀美邇加美而、於吹寒氣吹之狹霧所成神」古事記

▲熊野櫛樟日命 (書紀)

ロ、熊野大隅命

素神、天上にて惡戯をなしたため、神拂ひになつて後、再び天上に至り日神に善心に立ち歸つたことをお誓ひなされた時産みました御子六神中の御一方である。

ハ、熊野忍踏命

右は熊野大隅命と同一神であらう。

ニ、大背飯三熊之大神——天穗日命の子、健三熊之命、天夷鳥命ともいふ。書紀の大背飯三熊之大人は、使者稻背脛と、記の鳥船神と同神にて、其の功によりて、御名數々あるなり。さて熊野諸手船に乗つて、三保崎に至て、事代主神の諾否を問玉ふを、御使の名に負るなるべし、云々。(日本書記通釋)

# 疆域

古事記に出てゐる大熊云々の事柄については、吉田東伍博士の大日本地名辭書に「彼大熊の出でしと云ふも、當時神祇を祝祭せる部氏ありて、皇師に對敵したるを譬喩したるを云へるもの、如し。」と記してゐる。

時代に依つて、幾分廣狹の差のあつた事は、辭まれぬ事實だと思ふ。

現今の新宮市(新宮、三輪崎)其の附近を嘗て三前郷(後世同じく三前と書して三前郷と呼び串本町、潮岬村、古座町附近を指したものがあつたが、それとは違ふ。)といつたが、此の名義などから考へても、ある時代に於ける熊野は、此處を中心とした極く狭い範圍(クマ部族の根據は熊野川流域であつた。)であつたでなからうかとも私意されるのである。

▲三代實錄貞觀十七年十月の條に、紀伊國三前神とあるも、即ち熊野神であらう。三は古言眞の義で美稱の辭である。神武紀に熊野神邑とあるも亦此處であらう。

▲南紀名勝志に、新宮莊に上熊野・中熊野・下熊野の三村ありて、今新宮といふ。原は熊野村の中なれど、新宮大神鎮座あれば、後世かく云ふ。諸書に熊野村と云へるは、即ち此所なるべし。

大日本地名辭書に據る——。現今新宮市内に熊野地なる處がある、考ふべし。

併し乍ら、要するに古の熊野國は牟婁郡——牟婁・岡田・栗栖・三前・神戸・二色の諸郷を含む一圓を稱したもので、西は日高郡に至り、北は十津川、北山兩郷（大和吉野郡）に接し、東北隅は伊勢國に連り、南方は洋海に臨む地域で、現在の東西南牟婁郡（紀伊國南半）北牟婁郡（舊志摩國の一部）に亘る疆域を熊野の國と稱したものと見る可きであらう。

大化改新以前の熊野國には、木國（後の紀伊國）と相對して、國造があり、國神を祭祀し、民人の教化に力めて居たものである。當時の區域は、山麓連嶺恣に蔓延し、就中大塔嶺の如き山脚十里の長きに跨り、東西を縱斷して人跡を容れざる所すらあつた。

北——木ノ國との國境より、南更に北東に紆曲して大和の吉野山を包繞し、其の一角は錦山坂に至りて伊勢との國境をなしてゐる。

東南——熊野灘に面してゐる。

西——紀伊水道に臨んで半島を形造り、而して其の廣袤の平均は、東西三十五里、南北十二、三里。概ね、如上の此の地域を指して、熊野と呼んでゐたが、地位や行政等の關係上で牟婁郡・口熊野・奥熊野と三區分されてゐた。

A、牟婁郡、武漏、牟漏、室、無呂などと書く。

#### 名義

- 1、館しやうつみの義にして、海津官舎があつたから起つた名稱であるまいか。——續風土記——
- 2、溫暖の義で、溫室じやう即ち其の地の暖な事から起つた稱であらう。——全上——
- 3、熊野の神の鎮座されてゐる地であるから、御室の義をとつたものでなからうか。——地名辭書——
- 4、室のやうな地形——田邊灣の形狀——から起つたものとも思はれる。——地名辭書——
- 5、牟婁の溫泉——崎の湯——むろ、即ち窟室の形をなすところから呼ばれるのだらう。——喜田博士——
- 6、アイヌ語墾田の義——轉じて住宅、村里の意。——坪井博士——

#### 地域

現今の田邊を中心とした昔の、芳養・田邊・萬呂・三栖・秋津の五莊をいつたものである。元來此の郷は木ノ國に隸屬して、熊野國ではないと説く説もある。

（萬呂は昔丸と書ける由、牟婁と關係あるに非ずや。墾田の義の語、太平洋方面ではマラといへると坪井九馬三博士の考説など考へ併すべきである。）

B、口熊野

吉田博士の地名辭書によると西牟婁郡なりとある。紀伊續風土記には、自岡田郷東北至丹敷浦土世熊野國とあつて、岡田郷より三前郷に至るまでを口熊野としてゐる。即ち富田川筋から古座川に亘る地方を總稱したものと考えられる。

元來、口熊野と云ひ、奥熊野といふも、此の稱は公制に出たものでなく、随つてその界域も確然たるものは無かつたのである。後世和歌山藩が治政上、口熊野代官所なるものを現在の周參見町に設置して、紀南の一半を司らしめたのが、先づ公制として表はれた最初であらう。

C、奥熊野

地名辭書は東牟婁郡とある。しかし古は、古座川以東伊勢の國境に至る迄の地域で、往昔の神戸郷を中心として舊志摩、大和の一部―北山郷を含んだ範圍を指したものでらしい。奥熊野代官所は現南牟婁郡木ノ本町に設けられてゐた。要するに、奥熊野は大体に於いて、現今の東・南・北牟婁の三郡をいつたものと思はれる。

備考、熊野及び口熊野・奥熊野の稱は、現今も通稱されてゐる。徳川時代には、この地は田邊藩（安藤氏三万八千石）新宮藩（水野氏三万五千石）の封地が大部分で、又紀伊の本藩

（紀州徳川家）に屬する幾部分もあつた。

▲南紀徳川史 卷百五十二社寺制の項を觀ると、那智山、妙法山は口熊野にありとなし、新宮、湯峯、北山、木ノ本、尾鷲等奥熊野と見える。

しかも那智山享保十八年將軍より諸國勸化を免せらるゝ文書中に、紀伊國牟婁郡熊野とあり、又熊野座神社は紀伊國牟婁郡本宮村鎮座（明治四年太政官）とある。牟婁の名義 3 を思はしめる。

沿革

熊野と木の國とは、遠く洪荒草昧の時代から其の名が知られてゐるから、茲に其の概略を摘載してみる。但し治亂興亡とか、行政上の變遷といふでなく單に其の名稱を知る必要の項目のみに止める。

A、太古時代―神代。

日本書紀神代卷。

1、伊弉冉尊生火神時、被灼而神退去矣。故葬於紀伊國熊野之有馬村焉。

▲有馬村は現南牟婁郡有井村。

2、少彥名命待熊野之御碕、遠於常世郷矣。

▲熊野之御崎は現西牟婁郡潮岬村。

3、五十猛命、妹大屋津姫命、次狐津姫命凡三神亦能分布木種即奉渡紀伊國也、然後素盞鳴尊居熊成峯而遂入於根國者矣。等。

▲熊成峯は、成は野にて、熊野である。 Kumenari=Kumani=Kumano=Kumano

B、上古時代。

日本書紀神武紀

六月乙未、丁巳、軍至名草邑、則誅名草戸畔者、遂越狹野到熊野神邑、且登天磐盾云々。かくて辛酉元年春正月、天皇天津日嗣の御位に橿原の大宮に即かせ給うて、爰に群臣の論功賞を行はれ、天道根命を木國造に任命し給うた。之が木國造の始祖である。

國造本紀

熊野國造、志賀高穴穗朝(成務)御世、饒速日命五世孫阿斗足尼定賜。

C、中世時代以降。

孝德天皇の御代、所謂大化の改新が行はれた。其の節、諸國郡の廢合分置を行つた中に、熊野も廢國となり二分されて、其の一は志摩國に加へ英虞郡となし、一部は木ノ國に合して牟婁郡とな

した。併し、熊野國を廢して、牟婁郡として木ノ國となすと説く書もあつて、地名辭書に志摩國は後世紀伊牟婁郡、伊勢國度會郡の侵す所となり、國土大半を失ふとあれば、英虞郡の幾分は牟婁郡に含有された時であつたのであらう。

此の時代より以後は、交通も比較的頻繁となり、齋明・持統・文武諸帝の紀溫泉(武漏溫泉)への行幸を始めとして、爾來歴代の所謂熊野御幸など遊ばされて、今日九十九王子の遺跡(これは、纏めて一冊子として更に發表する豫定)や、熊野懷紙の名残など、史實と傳説とが相錯綜して、歌集に實録にさては軍記物語の上に、種々散見する處で、誰しもが知悉してゐるのであるから全部省畧するとにする。

主として、此の調査は今の東西牟婁にわたり地名を中心として調べて行つたから、其の歌が假令熊野と何等かの關係を持つものとしても、夫れ自身が地名に觸れてゐなかつたなら割愛してしまつた事を御承知して頂きたい。

眞熊野

マクマノ

熊野浦

クマノウラ

海の形狀を按ふに、潮岬、大島を中心として海岸は

其東北と西北に向つて延伸してゐる。其東北は志摩郡の麥崎に至る直徑七十餘里、其西北は日高郡日御崎に至る直徑五十海里許并に熊野浦と稱してよい。然し世俗多く其の東北面、潮岬から楯崎の海岸迄を指してゐるやうである。熊野浦を古く眞熊野浦と曰ふ。——地名辭書——

み熊野の浦の濱木綿百重なす、心は思へどたゞに逢はぬかも。——卷四——柿本人麿

▲濱木綿——濱芭蕉、濱おもとも云ひ、葉は幾重にも重つて莖を包んでゐるので『百重なす』の序にしたものであらう。——佐藤春夫著退屈讀本参照——  
たゞに——直接に。

熊野の浦に生える濱木綿の葉が、幾重も重つてゐるやうに、繁く思つては居るけれども、どうした故か、直接に逢ふ事の出来ないのが、うらめしくも悲しい。

御食つ國志摩の海部ならし眞熊野の、小舟に乗りて澳へ漕ぐ見ゆ。——卷六——大伴家持

▲御食つ——御饌調國の意、志摩の國が遠く神代の時代から長く後世に至るまで、朝廷及び神宮に贄を幣進してゐたものである。

熊野の小舟に乗つて、沖の方へ漕ぎ出て行くは、志摩の海人達であらう。そして、それらは御贄の料にと漁とる船である。

島隠り吾が漕ぎ來ればともしかも、俟へ上る眞熊野の船。——卷六——山部赤人

▲島隠り——海島に隔てられて、船の隠れるのを云ふが、必しも島に隠れなくとも、沖遠く行つて陸の方から見えなくなるをいふ。  
ともしかも——羨ましい哉の意。

眞熊野の船——古から其名があつて、一種の早船の類であらうと曰はれる。

日本紀神代卷——是時事代主神遊行在於出雲國三穗之碕以釣魚爲樂。以熊野諸手船（天名天鳩船天鳥船）載使者稻背脛遣之云々。

播磨風土記——明石驛家者、高津宮天皇之御世、伐楠造舟、其迅如飛、一〇去越七浪、仍號速鳥、按之鳩船者、速鳥之義、速迅之謂也。

萬葉名所考——熊野船と云ふは船の名なり。島隠の歌は播磨にて詠めるものにて、御食國の歌も伊勢にて詠まれたるなれば早船の類なるべしとも曰へり。按に今も熊野浦の鯨漁船は種々に彩りて花形など畫けるとぞ。土佐などにも鯨とる船は皆さやうにして、余の船に異なれり。上古より熊野にては然る様にせし事歟。さらば其様にならひて造れる船を何國のにても熊野船とぞいひけむ。

靈異記——熊野村人至干熊野河上之山、伐樹作船云々。この船を諸手船、熊野船と稱するでなからうか。

紀伊續風土記——其形今出雲國三穗神社の社壇の下に小さき船を納む。是を上世の諸手船の雛形と云ひ傳ふ。其形大抵左右の手を小指と無名指と合せたるが如くにて、底の平板なく尖りて今いふ鯨船などの様なりといへり。是水を切る事疾き船なれば、鳥にも喩へて天鳩船ともいひ、形を以て諸手船ともいひ、其の製する地名を以て熊野船とも云へるなる可し。神靈出雲國より諸手船に乗りて、此の地に遷座し給へる事などありしならむ云々。其の他、釋日本紀——卷八——參照。今按ずるに、現に官幣大社速玉神社（新宮市）に寶藏されて、毎年祭禮の際、熊野川に浮べて御船島を廻る神事に用ひらるる船は、其の面影を遺すものであるまいか。此の船を諸手船といふとは續風土記に記されてゐる。

遙々と播磨の方に漕ぎ下つて來て、漸々都に遠ざかるにつけても、種々と家路戀しくなり勝るのである。恰度其の折柄熊野船の倭の都の方へ、漕ぎ上つて行くのを見て羨ましきの泌々と感ぜられる。

浦回榜ぐ熊野舟はてめづらしく、かけて思はぬ月も日もなし。——卷十二——

▲浦み——浦曲

浦みこぐ熊野舟はて——めづらしくといふ序である。熊野にて鯨取船は、赤く黒く塗りて色々の花形など描いたから、古から他の舟とは異つてゐて、めづらしく美はしいから、それを熊野船と云つて、さて珍らしいに云ひつづけたものである。

家路遙に別れて來たもの、己が妻を愛憐い者と心にかけて思ひ慕はぬ月とて日とて全くない。

出立の松原

イデタチノマツバラ 今はデタチといふ。舊西ノ谷村（現田邊町）一帯の海濱を云つたもので、古、天皇（崇神天皇、後白河法皇などの傳説あり）の熊野行幸には、この出立の地に蹕を止めさせて、此に行宮を設けさせ給ふたといふ。其は今の金毘羅宮の背後、東の方に御所谷があり、其の下の海濱に潮垢離の濱などあつて、地名に今も其の名残を留めてゐる。

我が背兒が使來むかと出立の此の松原を今日か過ぎなげ。——卷九——

▲我が背兒が使來むかと——出立の序、わが夫の使が來ようかと迎に門に出て立つの意。

此の美しい出立の松原の景色を見捨て、今日こそ他所に過ぎて行かうか。それにしても、誠に名

残り惜しい限りである。

室の江

ムロノエ 現、田邊灣をいふ古名である。熊野の名義参照。

清 激

キヨナギサ 田邊町江川浦の海濱を云ひ、前述の潮垢離の濱と同所である。後世熊野参詣の諸人、此の濱に下りて潮を浴びて不浄を清めた所である。今は埋立てられて原形をとめぬ。

紀伊の國の室の江の邊に、千年に障むことなく、

萬世に斯くしもあらむと、大舟の思ひ持みて、

出立の清き激に、朝なぎに來寄る深海松、

夕なぎに來寄る繩海苔、深海松の深めし子等を、

繩海苔の引かば絶ゆさや、里人の行きの集ひに、

なく兒なす、行取り探り梓弓、弓腹振り起し、

し、き羽を二つ手挟み放ちけむ、人も悔しも、

戀らく思へば。

— 卷十二 —

▲思ひ持みて——深めし子等をにつゞく言葉。

出立の以下七句——其の地の形容を以て云つた句中の序。

深めし子等を——深く思ひ持みし子なるものを。

繩のりの——引かば絶ゆといふ料である。繩海苔は、いと弱いものであるから、海人の其を

探らうと引くと容易に切斷されるものであるから。

なく子なす——次の言葉の序である。

行取り探り——小兒の這行にて、物を探り取るやうに、女を眺ふとして、取付がるのをいふ。

梓弓以下四句——句中の序。

弓腹——弓の末に、腹と名づくる所がある。

し、き羽——未詳、古こな矢羽の稱があつたのか。

室の江の邊に女が住んでゐた。さて其處に男の親しく通ひ往つて、その女と千年萬年に事故なく、共にかくて語はうと奥を秘めて、思ひ持み居たものを、いで其の中をば引き離さうものとか、多勢の里人等が行集つて、争ひ取りすがり誘つて、我等の仲を引離つた。その時に、鬼も斯うもすべき様もあるべきに、尋常ならず安からぬ様であるから、後難を恐れて、よしやと思ひ切つて放つてしまつた事の、今はたこんな迄、戀しく思はれるにつけて、思へばさても悔しい事よ。

阿胡根の浦

アコネノウラ 千疊敷は湯崎にあり。附近に阿胡が島があるといふ。又宇井可道翁の説に舊西ノ谷村天神崎に千疊敷といふ所があつて、其の附近をいふとの二説があるが何れを是とすべきか。

我が欲りし野島は見せつ底深き、阿胡根の浦の珠を拾はぬ。――卷一――中皇女命往干紀伊温泉之時御歌

▲我が欲りし――我が見度いと思つた。

珠――眞珠、石に交れる玉、或は貝の事か。

かねて見度く思つて居た野島を見たから、思ひ残す事もないが、しかし阿胡根の浦の底が深くて、珠が拾はれないので都への土産にする事の出来ぬのが口惜しい。

伊素末

イソマ 田邊町大字湊磯間浦である。

月讀の光を清み神島の伊素末のうらゆ船出すわれは。――卷十五――

月の光の清くて明きが故に、まだ夜が明けぬが、神島の磯間の浦を船出して吾は漕ぎゆく。

神島

カシマ 田邊灣中の巨島、先年 聖上、紀南行幸の際畏くも植物採集に御上陸なつた島である。

風莫の湊

カザナシノミナト 今の瀬戸鉛山村にあつて、湯崎温泉に至る海上の入口で、綱不知といつてゐる。どんな風波の荒い時でも、ここ許りは綱を用ひずに易々と舟がかりする事が出来る意。

風莫の濱の白浪徒に、こゝに寄り来る見る人なしに。――卷九――長忌寸意吉麿

風莫の濱の白浪が、寄せ来る景色の此上もなく面白いのを家人などと共に見るならば、如何に楽しからうと思ふが、其の人もないのに寄せくるは、嗚呼惜しい事だ。それにつけても、徒の白浪である。

手綱濱

タヅナノハマ 前同所か。

遠妻しそこにありせば知らずとも手綱の濱のたづね来なまし。――卷九――

▲遠妻し――遠く故郷に別れ来たる妻。

遠く別れて来た故郷の妻が、故郷の家に有らば、たとひ道は知らずとも、尋ね慕ひ来て、この面白き風景を眺めるであらう。

#### 白良の濱

シララノハマ 網不知から鉛山に至る間の白砂青松の海濱で、古今詩歌に多く詠まれた處である。牟婁の温泉に遊ばれた時必ずこの邊を御通過になり、又逍遙されたと考へるのが當然である。附近に『御幸の芝』『御船谷』『御腰掛岩』などの遺跡があるに依つて見ると、この風光を詠んだ歌が萬葉集中一も見えぬとは考へられない。古義中の岡部氏の説として挿入したものは、強ち排すべきものでないと思ふ。

白浪の濱松が枝の手向草、幾代までにか年の經ぬらむ。——卷一、九—川島皇子、或は山上憶良

▲白浪の濱——白良の濱で浪は良の誤であらう。枝は根の誤か。

手向草——神に奉れるもの、それを松に掛け置いたのである。草は借字で種の意、何にてもあれ手向の具をいふのである。

この濱松の枝にかゝつてゐる手向種は、今は幾代といふ程長い年月日を経てゐるであらう。とその

手向草に事寄せ給うて古を懷ふ意を述べられたのである。

備考——この歌を白良の濱とするには、齊明天皇が紀温泉に行幸あり、又中皇女命紀温泉におはしてこの御歌がある。齊明天皇は川島皇子の御祖母にましくて、中皇女命は御伯母に當らせられる。この御二万紀國温泉に在し、時、此の濱松の附邊にて、手向させ給ふを詠ませ給へるとすれば、温泉に近く、逍遙に宜しきこの濱と考へるは、極めて穩當と思はれる。

#### 牟婁の温泉

ムロノイデユ 瀬戸鉛山村の所謂湯崎温泉——鉛山温泉である。古昔天皇の數々行幸なされた處で、萬葉集中、卷一には、幸于紀温泉之時、額田王作歌、中皇(女)命往于紀伊温泉之時御歌等見えてゐる。

日本書紀——齊明天皇四年冬十月庚戌甲子幸于紀温泉。この時皇太子(天智帝)もお従ひ給うた。

日本書紀——持統天皇四年九月天皇行幸。

續日本紀——文武天皇大寶元年九月丁亥太上天皇幸紀伊國冬十月丁未車駕至武漏温泉云々。などあつて、古くから知られてゐた。

湍門の崎

セトノサキ 瀬戸鉛山村の瀬戸崎をいふ。

鳴島

ナルシマ 現今塔島といふは、鳥島の訛であらう。鳥島は鳴島である。瀬戸崎と塔島との間は潮が満ちて来ると、船で通過する事が出来、磯こす浪の袖にかゝる例しがあると故宇井可道翁の説。今、京大臨海研究所裏の番所ヶ鼻の史蹟に立つと、此の邊の勝景が一眸の内に收められる。

室の浦の湍戸の崎なる鳴島の磯越す浪に沾れにけるかも。——卷十二——

家の妻を思ふ情さへ誠に堪へ難いのに、それに鳴島の磯浪にぬれながら、さても苦しき旅をするものよ。

形見ヶ浦

カタミガウラ 現今の新庄村東光寺下の入江をいふ。田邊灣に面した部分は神島、旗島、神樂島等を望んで風光畫にも似た處である。

妹ヶ島

イモガシマ 神島、鳥島の附近にある一小島で、金鑄島、(現今のかなや島か?)一名鑄物島の訛が妹の島であるとの説。續日本紀、大寶三年牟漏郡獻銀の事が録されてゐる。そして其

の産地は鉛山附近であるのが明瞭な事實である限り、島名の中にもこの種の名を有するものがあつて不思議でない。

藻刈り船澳檣ぎ来らし妹が島、形見の浦に田鶴翔ける見ゆ。——卷七——

海人が藻を刈る船の沖の方より漕いで来らしい。其の船に驚いたのか、妹が鳥形見の浦のあたりを鶴の飛び翔けるのが見える。

備考——地名辭典には形見浦を海草郡加太浦、妹が島を友ヶ島としてゐる。

形見は鴻見の意で干潟が見ゆの意とすれば、この地誠にふさはしく、現今新庄の名も亦關係深いものである。又鶴は古昔この地方にも飛翔して來た事は、鶴に關する傳説などあるに依つて明かである。——稻成村傳説——

更に、この歌は柿本人麻呂の歌といはれるにつけても、彼が大寶元年九月に、太上天皇となられた持統天皇並に時の帝文武天皇の駕に従ひ、再び紀伊に遊んで熊野の方まで來てゐたのが知られる。續日本紀に文武天皇大寶元年九月丁亥天皇幸紀伊國、冬十月丁未車駕至武漏溫泉云々と、時に持統帝御年五十五、文武帝は十九にましまし、人麻呂は

三十七才の壯年であつたが、先年共に遊んだ妻は早くも世を去つてゐた。懷舊の情戀々たるものがあつて、熊野に來る途中、玉津島を見、黒牛瀨を過ぎ、飽浦に來り、磐代を通り、人國山の木の葉に亡き妻を思ひ出して、追慕の情の切なるものがあつた。しかも妹と云ひ形見といふも、名を聞くにつけて思ひ出の一人に深かつた事であらう。必しも加太浦とのみ考へなくてよいと思ふ。寧ろ彼の旅路からいへば、こゝにする方が妥當であるまいか。

### 人國山

ヒトクニヤマ 萬呂村にあつて、俗に訛つて人目山と呼んで居るのがそれであるといふ。

●續風土記——上秋津村の小字に一目といふ山あるを人國山とし、寶滿寺の山號を岩倉山云々。

●和漢三才圖繪には、牟婁郡芝村にありとある。

見れど飽かぬ人國山の木の葉をし、己が心からなつかしみ念ふ。——卷七—柿本人麿

▲寄木といふ題で、女を木の葉に喩へたもの。——前備考参照——

見れどもく見飽かぬ人國山の木の葉の美はしいを心の奥底から沁々となつかしく思ふぞ。

常知らぬ人國山の秋津野の、かきつばたをし夢に見しかも。——卷七——

▲常知らぬ——序、常に經知らぬ他國（人國）とつづけたもの。

かきつばた——紫の美しい花であるから、色ある人に喩へたのである。

人國山の秋津野の、その澤に咲いた燕子花の美しいのを——そのやうな美しい人を——現には見ることが出来ないで夢に見たわい。

備考——澤瀉久孝氏、人國山——所在不明である。秋津野と詠まれてゐるので、吉野だと言はれてゐるが、今吉野に人國山の名が残つてゐない。

紀伊國田邊町の北に秋津村があつて、その北に人國山がある。云々

### 秋津野

アキツヌ 現在の上秋津、下秋津、秋津川の三村を古、秋津の里と呼んだもので、夫本抄其の他の歌書に見えるが、萬葉のものには、大和にも同名の地ありと記し、其處をさしてゐるが、人國山、石倉山があり、又往昔熊野行幸の本道に當つてゐた土地である事を思へば、此の地も亦大和と定めずともよいではあるまいか。

あきつ野を人のかくれれば淺ましき、君が思ほえて嘆きは止まず。——卷七——

▲人のかくれれば——人が言葉にかけて云ひ出せば。

朝ましき——火葬の灰を朝に蒔散らしたと云ふ意。

秋津野のことを、人が言葉にかけて云ひ出すと、其の野で火葬の灰を朝に蒔散らした其の君がありし世の時の思ひ出されて哀れさても悲しやと、息づかれる歎は止まらない。

秋津野に朝居る雲の失せぬれば 昨日も今日もなき人おもはゆ。——卷七——

秋津野に朝居る、火葬の煙の雲の立ち消えて行くと、今までに死んだ人の形見に見た煙も、再び見ることがないと、いよく亡き人の戀しく思はれて、昨日も今日もあはれに悲しい。以上二首挽歌である。

秋津野の尾花かりそへ秋萩の、花を葺かさね君がかりほに。——卷十一——柿本人麿

同じ事なら、秋津野の尾花を刈り添へて、秋萩の花で君が假庵の屋根を葺き給うて、旅の心を慰め給へ。

留りにし人をおもふに秋津野に、ある白雲のやむ時もなし。——卷十二——

▲人——妻。

居る白雲——下り居る白雲の消せる時がない事から、止む時なしの序。

家に留つて居る妻を戀しく思ふに、思ひ止まる時とて更にない程切である。

### 石倉山

イハクラヤマ 今は岩倉山、下秋津村寶満寺のある山である。澤潟氏は、紀州の秋津の北、人國山の東南のところにも岩倉山といふのがある。その麓をいはくらの野と云つたとすれば、これも紀州の地名になる、地形から見ると紀州の方が一層ふさはしいやうに思はれるが……云々。

石倉の小野ゆ秋津に立ちわたる、雲にしもあれや時をじ待たん。——卷七——

▲雲にしもあれや——しもは多くある物の中で、その一を取り出していふ助辭。あれやはあれかしの意。

石倉の野から、はる／＼と秋津の野まで、見るが中に立ち渡る雲にてもあり度いものだ。そうしたら通路遠くても吾が身は容易に通ひ行きて、逢ふことの出来るものを、その雲でもなければ、逢ふ可き時の来る迄待つて居らう。寄雲といふ題である。

三栖山

ミスマ 中邊路に沿ふ三栖村の山々をいふ。

莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣、吾瀬子之射立爲兼五可新何本。で莫囂圓隨は萬葉集中難解で、諸説紛々たるもの、夕月の(契仲)、香具山の(荒木田久老)、紀の國の(荷田春滿)、かまやまの(本居宣長)、まつち山(橘守部)、みもろの山(石川雅澄)、などあるが、折口信夫氏は之を三栖山と訓んでゐる。  
——同氏萬葉集辭典三栖山の條參照——

三栖山の檀弦はけわが夫子が、射部立たすもな吾か偲ばむ。——卷一——幸于紀溫泉之時額田王作歌又松岡靜雄氏の『古語大辭典』には、

しづまきの弓に弦はけ吾せこがい部たたしけむ嚴檀がもと。

▲三栖山の檀弦はけ——い部立たすの序と見るべし。

い立たす——いは發語。  
いつ檀——神を齋へる山路の檀にて、後世神木といふものなり。(據畧解)

以上 西牟婁郡。

玉の浦

タマノウラ 現下里町粉白附近の海で、小島は、其の海の大小の島々を指して云つたものである。

荒磯ゆも益して思ひや玉の浦さかる小島の夢にし見ゆる。——卷七——

荒磯も面白くはあるが、其の荒磯よりも益して目出度く思ふ故にか、玉の浦を離れた小島の數々が、定かに夢に迄見える。

吾が戀ふる妹に逢はさず玉の浦に衣片しき一人かもねむ。——卷九——

▲逢はさず——逢はずの延。

斯んなすさまじい荒海邊であつても妻と共にあるのなら少しは慰む方もあらうが、戀しく思ふ妻には得逢はないで此の玉の浦の海邊で獨寢をする。誠に堪へ難い。

玉くしげ開けまく惜しきあたら夜を、衣手かれて一人かも寝む。——卷九——

前首と同じ所で、同じ時に詠んだものであらう。

佐野の岡

サヌノヲカ 現新宮市三輪崎町佐野、狹野とも書く。

秋風の寒き朝けを佐の岡、越ゆらむ君に衣貸さましを。——卷三——山部赤人

▲寒き朝けを——寒き朝明なるものをの意。

然らでだに旅は苦しいものを、秋風の寒い此の朝明なるを、衣さへ薄くて佐野の岡を越えて行く君の、どんなに寒さに堪へ難く、わびしい事であらう。わが衣を貸してあげたいと思ふけれど、道の遠くて心に協はぬのが、一入あはれにやるせなく思ひ遣られる。

神か崎

カミノサキ、ミワガサキ 現新宮市三輪崎町。

苦しくも降りくる雨か神か崎、狹野の渡に家もあらなくに。——卷三——長忌一寸奥麿

▲降りくる雨か——降り来る雨かな。今まで降らなかつた雨の降つて來たのが、甚だ苦しい。家もあらなくに——立宿るべき家もない。

歌の意は明瞭であるから省く。後世の歌に、『駒止めて袖打ち拂ふかけもなし佐野の渡の雪の夕暮』なる歌は此の歌から出たもので、單に面白く詠んだものであると荒木田久老の説。

神の前荒磯も見えず浪立ちぬ、何處ゆ行かむよき路はなしに。——卷七——

▲よき路はなしに——暴き浪を避けて行く道が無い。

神の埼の荒磯も、其處とも見え分らぬまで、荒浪立ち騒いで來たので、それを避けて他に行くべき道がないので、何方から行かうぞ。

潮満たば如何にせむさかわだつみの、神が戸渡る海部乙女ども。——卷七——

▲神の戸——神の門、即ち神崎。

さらぬだに波荒くて、甚だ危く見えるのを、潮満ちて來たならどうして逃げようとてか、海女どもが神が戸を渡る事であらう。

此の外、本地方にあつて土地の不詳のものには、

八十隅坂

ヤソノクマザカ 『熊野を冥途黄泉の神なる由をいへば熊野の阪をすべて八十隈阪といへるにや、また熊野新宮に宮戸とて泉守道守の社あり、此所泉津平坂の標示なるよし、然は此所をさしているか』紀州舊蹟志。

現田邊町江川より商業學校に至る坂ある山を蘇生山といふ。考證の餘地があるまいか。

百たらず八十隅坂にたむけせば過ぎにし人に蓋しあはむかも。——卷三——刑部垂麻呂

百たらず——八十隅坂の枕詞。

八十隅坂に手向けして、ねんごろに神に祈つたから、死んだ人も亦立還つて來て逢ふこともあらうか。

以上東牟婁郡であるが、此の外に新宮川に關するものがあるといはれるが、遂に摘出する事が出来なかつた。

此の外、當熊野地方に所在するものとして、次のものがあるが、未だ何處とも考證されてゐない。

小爲手山

ヲステ山 緒捨山紀伊牟婁郡に在りと千蔭の略解に出てゐるが、不詳。

安太郎ゆゑ小爲手の山の槇の葉も久しく見ねば蒼生にけり。——卷七——

安太へ行く小爲手の山を久しく見なかつた間に、その山の眞木の葉にまでも、苔がむしていと舊めいて、昔見たとは大變様子が變つた。

嗚呼兒浦

アコノウラ 類聚名物考に紀伊とある。阿胡根の浦、飽浦と考證すべきか。とすれば前述の阿胡根の浦の位置と作者柿本人麿の事蹟と關聯して無稽のものとも思はれない。

あこの浦に船乗りすらむ乙女等か珠囊のすそに潮満つらむか。——卷一——柿本人麿

伊勢の海

イセノウミ 志摩の海をも併せて伊勢の海と詠んだとも思へる。とすれば志摩の國の一部が熊野國であつた關係上比較的之に近いものを拾つて見る。

伊勢の海の蟹の志摩津があはび珠とりて後もか戀のしげけん。——卷七——

▲あまのしづ——昔あつた伊勢の海人の名か。

海人の島津が、鰻玉を採るやうに思ふ人を得たなら、うれしいと思うだらうが、さはなくて却つていよく戀しく思はう。逢ひ見ての後の心に比ぶれば昔は物を思はざりけりの歌の意と同じやうなものである。

伊勢のあまの朝な夕なにかつくとふ、あはびの貝の片思ひにじて。——卷十一——

▲朝な夕な——朝魚夕菜——凡てなと云ふは、飯に副へて食ふ物をいふ、俗に菜といふ。こ、は朝食夕食の菜料に、貝を潜りとるを云ふ。古言に朝々を朝那朝那といへるのがあるから、こ、を單に朝夕とするはよくないと古義に出てゐる。

あはびの貝の——獨思をいふ爲めの序。

自分丈けが深く思ふ許りで、人はそれとも知らず、片思ひにて、誠にわびしい事である。

伊勢の海は此の外數首あるが、志摩に關係あるものとしては、海士を詠んだものでなければならぬ

と考へて、以上二首を摘出したに止める。

○

以上極めて簡略なものであるが、兎にも角にも羅列してみた。参考にした書は紀伊續風土記、和歌山縣地誌、地名辭書、田邊町誌、夫木和歌抄、萬葉代匠記、萬葉地理紀伊篇、萬葉集新釋、萬葉集名所考、日本歌學全書(九、一〇、一一編)、類聚名物考、田邊要史、湯崎溫泉案内記、串本町誌、紀伊郷土研究等を主とし、猶故鈴木宿陽先生、東牟婁については紫安泰應先生の御示教を仰いでゐる。併し充分參考書を集められぬ位置にあるので自分ながら隔靴搔痒の感に堪へぬが致し方ない。

歌及び歌の解釋については、主として『萬葉集古義』に依つたもので、彼此參考して其の中庸を取るべきであるが、その出來なかつたのは遺憾である。

熊野と萬葉集 (終)

## 『熊野文化叢書』發刊について。

私達は趣味として、郷土の資料を蒐集したり、研究したり、調査するのを愉快とするものである。之に依つて、我が郷土をより深く認識し、そして郷土を顯揚し、延いて郷土愛の根本義に徹し度いと思つてゐる。

由來、わが熊野の地は、古い歴史と特殊の文學に育まれて發達して來た神秘の國である。それが今や日に月に交通の開け行くにつれて、この特色は漸次消滅して行くのではないかとの感が泌々とする。

此の際、此の時、失はれて行く熊野の文化を拾ひ集め、整理する事は、又郷土認識への或る部面をなすものだと思ふ。それで私達は微力ながら——ありの儘の報告者としての郷土人の立場に身を置いて、——各種の方面に亘り、郷土文化の蒐集調査をやらうと計劃したのである。

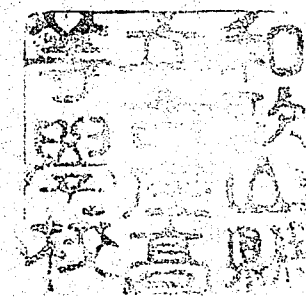
無論學者、専門家でないから、當然此の研究は、科學的正鵠を期し得ないに違ひない。しかし得ないからといって、無價值と考へ度くない。こゝに私達の自由さと、恰も山を探つて鑛脈を掘りあてる鑛山師の如き喜悅があるやうに思ふ。

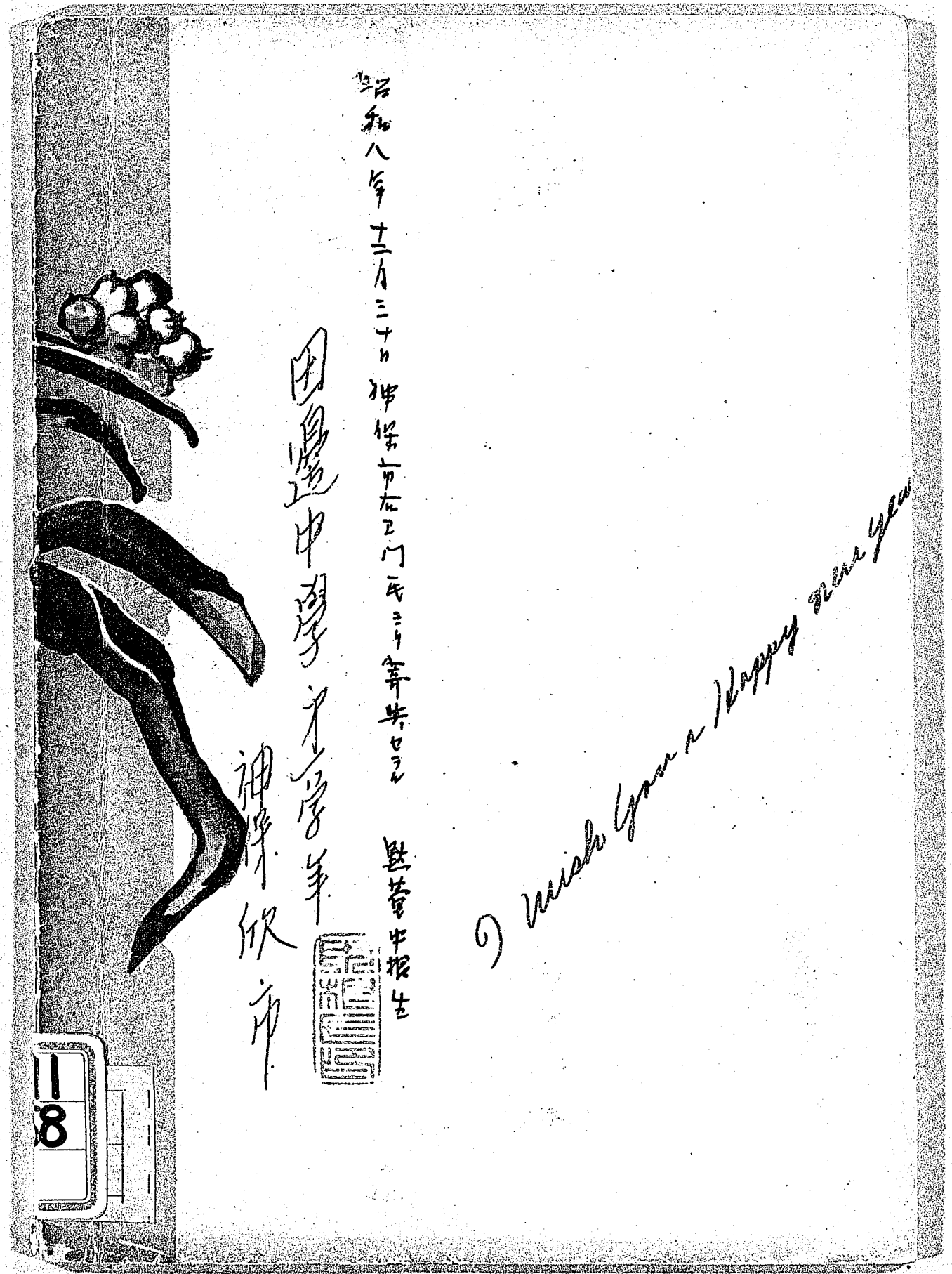
牽強附會の喉は當然受ける……假令それに疑問があり、考證上の餘地が充分あつても、郷土と何等かの關聯ありと認めたなら、出來得る限り記録するを本体としてゐるからには……。

要するに、研究の報告書たる本叢書は郷土文化の素材を提供することによつて、正しい深い研究を識者に俟つもので、これが、熊野文化建設の礎石たるを得たなら、同人の目的が達したわけで幸甚とする。この意味に於いて敢て本叢書を世に出す所以である。

終りに當つて、私達がこの計劃を立てるや、校長宮崎先生、内外多忙寧日なきにもかゝらず會長となつて戴き、激勵鞭撻と、各方面にわたり御心配を下さつた御蔭で、こゝに新裝なつて發刊に至つたことを心から感謝するものである。

熊野文化會同人





昭和八年十二月三十一日 神保町五丁目 氏ヨリ 寄書セシ  
塾長中根生

田邊中子才学年  
神保町

I wish you a happy new year

18